

平成 24 年度 海外臨床薬学研修報告書
「薬剤師の在り方について考えた 2 週間」

研修期間：平成 24 年 6 月 10 日～6 月 24 日
研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

07097345

富田 奈央

今回、私はアメリカ、アラバマ州にあるサンフォード大学にて2週間の研修に参加した。この研修に参加しようと思ったのは、現在の日本の薬学教育はアメリカをモデルにしていると以前から耳にしており、一度日本の目指す現場を自分の目で見て確かめたいと思っていたこと、また将来私は薬剤師として病院に勤めたいと考えており、自分が目指すまだぼんやりとした将来の薬剤師像をアメリカの薬剤師を知ることでより明確なものとするのではと思ったからだ。また、私は患者さんの薬物治療だけでなく、薬に対して不安を抱えた患者さんの心もサポートできるような薬剤師になりたいと考えており、医療先進国のアメリカで、薬剤師がどのように患者さんと関わっているのかについてもとても興味があった。

私が見学させて頂いたのは、病院は St. Vincent's Hospital、St. Vincent's East Hospital、Children's Hospital、薬局としては FMS Pharmacy、Rocky Ridge Pharmacy クリニックとしては Christ Health Center、Jefferson County Department of Health を回り、これに加えて在宅の宅配と輸液の調製を専門で行っている薬局(Southern Medical Services)も見学させて頂いた。ひとつひとつの施設で、それぞれ感じたことがあり、新しく知ること、学ぶことを心からおもしろいと感じた貴重な2週間であった。今回は特に印象に残ったことを記載したいと思う。

まず、私が将来目指す「病院薬剤師」についてである。一つ目に訪問した病院である St. Vincent's Hospital では、医師1名、薬剤師(Pharm.D)1名、学生2名で構成されるチームのICUのラウンドに同行させて頂いた。診療の流れは、まず、チーム内で学生の担当している患者さんについての検査値や処方薬についての確認を行った後、医師と学生の二人で、患者のベッドサイドまで出向き、問診を行っていた。その後、チーム全体で更に処方薬の検討を行い、処方提案や投与量の変更について議論がなされていた。その後、ICUよりも軽症患者のいる一般病床についても、同じ流れでラウンドを行っていた。ここでまず衝撃を受けたのは、日本の学生実習よりも、アメリカの方が学生時代から薬物治療に責任を持ち、医師と対等にコミュニケーションをとっているという点である。日本では医師と学生が1対1で話す機会はなかったが、アメリカでは当たり前のように薬物療法についての会話がなされていた。また、学生や医師、薬剤師がiPhoneやiPadを用いて処方薬の検討や患者情報の管理を行っていることについても驚いた。後に知ったことだがこれらの電子機器の医療現場への導入は、昨年度には見られなかったことであり、ここ1年で急速に普及したようであった。

St. Vincent's East Hospitalでも同様のラウンドに参加させて頂いたが、ここでは研修医と医師のチームと一緒に薬剤師と学生のチームがラウンドするというスタイルをとっており、学生のうちから、チーム医療を意識できるような教育プログラムが組まれていることが印象的であった。日本においても学生時代から、医師と薬剤師が互いに当たり前のようにチームで実習し互いの職能を發揮することの利点を知っておけば、社会に出ても自然と助け合うことが出来る関係が築けるのではと思った。St. Vincent's East Hospitalのファカルティに話を聞くと、アメリカでも昔は薬剤師の地位は今ほど高くなく、積極的に歩み寄って行くことが大事だと同じ、自身も将来薬剤師として何が出来るのかを考え、他の医療従事者に示していく必要があるのだと思った。

それぞれの病院を回っていくうちに気付いた点がある。ラウンドに同行させて頂いている間、

医師と薬剤師との会話は頻繁になされているが、患者さんと薬剤師との会話はほとんど見られないという点である。これについては、病院薬剤師と患者さんとの関わり方を自分の目で確かめたいと思っていた私にとっては意外であった。病院薬剤師は、チーム医療の中での重要性が高く医療従事者との連携が密な分、患者さんとの会話やコミュニケーションをとる時間は日本と比較してもあまり設けていないようだった。その分 Community Pharmacy での薬剤師と患者とのコミュニケーションが重視されているようだった。私は、病院で薬に対して不安を抱える患者のベッドサイドにまで積極的に足を運び検査値や数値データからだけでなく、患者さんの気持ち、会話も含めて薬物治療に生かしたいと考えている。一方で、アメリカのスタイルはより合理化・効率化された医療であるように思われ、どちらが正しいとは言い切れないように思った。日本も今後薬剤師の病棟常駐化に伴い、他の医療従事者との連携の重要性が更に高まっていくと思われるが、その中でも「患者さん」とのコミュニケーションのスタイルについてもあるべき姿を考えていけたらと思った。

次に FMS Pharmacy という街の Community Pharmacy を見学した時のことについてである。ここで特に印象に残ったのは、糖尿病教室に参加させていただいた時のことである。日本の病院実習においても、糖尿病教室に参加させて頂いたことがあるが、FMS Pharmacy で行われている糖尿病教室は日本とは大きく異なったものであった。FMS Pharmacy の糖尿病教室は2種類あり、その薬局のファカルティが自主的に無料で行っているものと、保険加入者のみ対象として行われる有料のものがあるという。今回は前者の見学であった。私の中で日本での糖尿病教室のイメージは、講義形式で、講師となった薬剤師が患者さんに一方的に糖尿病についての授業を行うというものであった。しかし、今回見学させて頂いた糖尿病教室は、薬剤師を囲んで、患者さんたちが円形に座り、座談するような形式をとっていた。まず第一声に「みなさんは何を知りたいと思ってここに来ましたか?」と患者さんに呼び掛けることから始まり、患者さんと同じ目線で、患者さんの疑問を一つ一つランダムに聞き出していくといった日本では見られないスタイルだった。このような糖尿病教室の利点は2つ上げられると思う。まず一つ目に、薬剤師からの一方通行でなく、患者さんも参加型の糖尿病教室とすることで患者さん側からの興味や理解度が上がるということだ。実際、初めはあまり興味を示していなかった患者さんも次第に熱心にメモを取るようになる様子が見受けられた。二つ目に、同じ境遇の患者同士が集まることで、情報の共有や、糖尿病治療への意欲の向上が期待できるという点だ。実際に見学していると、患者さん同士で使用している薬剤や食事について情報共有する姿や、糖尿病の新患の方で、自分が糖尿病であると受け入れることができている患者さんが次第に糖尿病の知識の共有に積極的になっていく様子が見られた。このような環境を無償で提供しているファカルティの熱意に敬服するとともに、日本の調剤薬局もこのような活動をすることによってもっと地域医療の中での重要性を高められる可能性があると思った。

全体として、アメリカの薬剤師の地位の高さ、医療チームへの貢献は確かなものであり、これは、アメリカの薬剤師が医療現場の中で他の医療従事者と信頼関係を構築してきたからこそできることであると感じた。また、それぞれの職種の役割が明確化されていると感じた。というのは、日本ではまだ薬剤師の業務としてどこまで行えるものなのか模索している状態であるが、アメリカでは、お互いの職域を理解したうえで、自分の役割をしっかりとこなしていると感じたからだ。具体的に

は、注射は誰が打つのか、バイタルサインは誰が取るのか、薬剤の管理は誰がするのかなどがはっきりしているのである。日本もこれからそうなるのであれば、どこまで薬剤師ができることなのかを積極的に示し、信頼関係を獲得していくことが重要であると思った。更に、学生時代から医療現場でより薬物療法の責任を負うことで、医療従事者としての自覚を持つことができ、それが将来医療現場での地位向上につながっているのではないかと思った。そのためにも日本の薬学生も自覚を持って実務実習に臨み積極的に学ぶ姿勢を持たなければならないと思った。また、アメリカの医療と日本の医療では保険の制度や社会・文化的背景が異なっており、その分両国の医療が抱える問題も大きく異なっていると感じた。大切なのは、アメリカの医療をそのまま取り入れるのではなく他の国の医療を知ることで、今の日本の医療、薬学について客観的に見つめ直すことなのではと思った。何が自国で長所であり短所であるのかを理解し、長所は伸ばしつつ、取り入れるべきものは取り入れ日本に最もマッチした形で向上していくことが重要である。

今後はこの経験を生かして、薬剤師の医療チーム内での信頼性の獲得、職域の拡大を目指したいと思った。そして、日本に合った薬剤師の姿を模索して行きたいと思う。